

情報収集努力の閾値効果と逡減効果： 行動満足への影響

—消費者調査に基づく探索的考察—

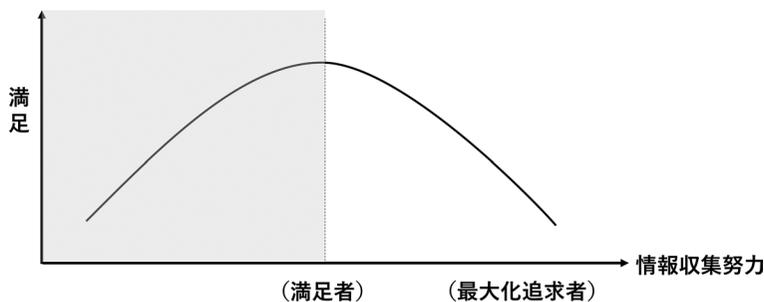
近藤 浩之

I. 問題意識と研究目的

拙稿（2025）では消費者による購買前の情報収集努力が購買後の満足に及ぼす影響を及ぼすと考えられるかについて、先行研究の成果を踏まえ、図1に示されるような情報収集努力と満足の関係を想定した上で、仮説を設定し、筆者が実施した消費者調査のデータに基づき検証した。その結果、仮説1「情報収集努力は行動満足に直接正の影響を及ぼすとともに、製品満足への正の影響を介して行動満足に間接的に正の影響を及ぼす」については支持されたものの、仮説2「情報収集努力が行動満足に及ぼす正の影響は努力量が増えるにしたがって小さくなる」と仮説3「情報収集努力が製品満足に及ぼす正の影響は努力量が増えるにしたがって小さくなる」については支持されなかった。

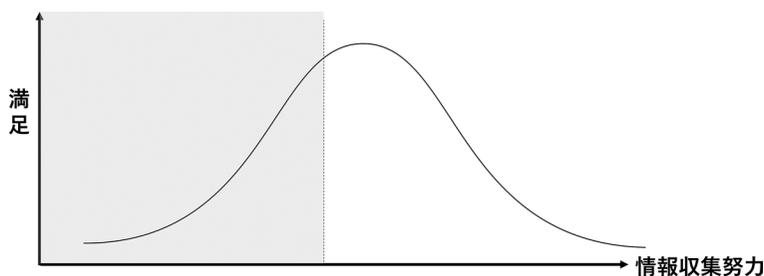
図1に示されているように、拙稿（2025）の仮説2と仮説3では、多くの消費者が位置する領域において情報収集努力は満足に正の影響を及ぼすものの、その影響力は情報収集努力の水準が上がるにしたがって小さくなっていくことを想定していた。しかしながら分析結果は、「多くの消費者が位置する領域において情報収集努力は満足に正の影響を及ぼす」という点については仮説と整合的であったものの、情報収集努力が満足に明確に正の影響を及ぼすのは情報収集努力が一定の水準を超えてからであることを示していた。分析結果に基づき

図1 本研究において想定する情報収集努力と満足の関係



注. 多くの消費者は灰色の領域に位置することを想定
出所) 近藤 (2025) p.91.

図2 分析結果に基づく情報収集努力と満足の関係に関する代替案



注. 多くの消費者は灰色の領域に位置することを想定
出所) 近藤 (2025) p. 98.

情報収集努力と満足の関係についての代替案として提示したのが図2である。

但し、拙稿 (2025) ではこうした代替案を仮説化するにあたっての課題を2点指摘した。1つは情報収集努力の水準に閾値が存在すると考えられる根拠について明らかにする必要があるという点である。そしてもう1つは、同稿においては最大化追求者 (maximizer)¹⁾ と満足者 (satisficer)²⁾ の違いに焦点を当てつつも、両者を識別して分析することができなかった点に関係する。同稿では典型的な最大化追求者タイプの消費者の数はごく限られているとみなし、先行研究 (Huang & Zeelenberg, 2012; Iyengar et al., 2006; Ma & Roese, 2014; Schwartz et al., 2002) において確認されてきた「情報収集を徹底的に行おうとすると満足は低くなる」という関係については、そもそも仮説化していなかった。また、分析結果からもその可能性を示唆するような傾向は確認できなかった。すなわち、仮説の前提となる図1や分析結果に基づく代替案を表現する図2で示した「情報収集努力の水準がある程度高くなると満足の上昇に歯止めがかかり、やがて下降に向かう」というような関係が本当に存在するのか否かについては明らかにできていない。そうした問題意識を踏まえ、同稿では、最大化追求者タイプの消費者は (分析結果に影響を及ぼさないほど) 本当にごく少数なのか、あるいは、そうした消費者は少なからず存在するものの、そうした消費者の満足は実は低くないのではないかといった点を明らかにできるよう、さらに考察していく必要があることを指摘した。

なお、拙稿 (2025) では満足を行動満足と製品満足に分けて捉えることが重要である点を指摘したが、本稿では行動満身に絞って考察するため、ここでその理由を記しておく。製品満足は製品特性に関する当該消費者の事前の期待と事後の認識の乖離に影響されるが、製品特性は消費者にとって統御できないものである。したがって、消費者行動という観点から考えた場合に、一貫性がより高いと考えられるのは消費者の中で完結する部分が多い行動満足の方であると考えられる。こうしたことから本稿では情報収集努力の満足への影響を明らかにする上での第1段階として、そのメカニズムを把握し易い「情報収集努力から行動満足へ

の直接ルート」に焦点を当てることが適切であると判断した。拙稿（2025）において確認した通り、情報収集努力から行動満足への間接的な影響を含め、製品満足も重要な意味をもつ概念であることから、製品満足に関わる問題については稿を改めて考察することにした。

以上を踏まえ、本稿では、情報収集努力の閾値効果に関わる論点1として「情報収集努力が一定水準に達するまで行動満足に明確な効果が見られないのは何故か」、情報収集努力の逡減効果に関わる論点2として「情報収集努力が高水準に達すると、行動満足に対する効果は逡減するのか」を設定し、「購買前の情報収集努力が購買後の行動満足に及ぼす非線形的効果」の仮説化の前段階として、拙稿（2025）で用いた消費者調査データから考えられる可能性について探索的に考察することにする。

II. 情報収集努力に関係する要因の整理

上述のような情報収集努力が行動満足に及ぼす非線形効果については、情報収集努力と行動満足のみを観察からでは理解が難しいため、本稿では情報収集努力を取り巻く様々な要因を取り上げて、それらの要因と情報収集努力や行動満足との関係に注目することにする。その際、それらの要因の影響力が情報収集努力の水準によって異なるのか否かについても確認し、情報収集努力の行動満足に対する効果が非線形となる原因を示唆する知見を得ることとしたい。

情報収集努力に焦点を当てた場合、何故、そのような努力が払われることになったのかという観点から、それに先立つ情報収集目的に着目する必要があると考えられる。そうした目的の中には、自分に適した商品の発見のような肯定的な結果の獲得を目的とするものもあれば、失敗購買による後悔のような否定的な結果の回避を目的とするものもあろう。

次に問題となるのが、情報収集目的を踏まえた、情報収集行動の具体的な現れ方に関わる情報収集方針である。情報収集方針の中には、多くの商品に関する情報を収集しようとする、あるいは特定の商品についてしっかりと情報を収集しようとするなど、「情報収集スタイル」に関わるものがあると考えられるが、そうした情報収集スタイルは情報収集努力を促す方向に働く可能性がある。但し、情報収集スタイルの中には、収集する情報の量よりも質を重視するなど、情報収集努力との関係において正負どちらに機能するのか判断が難しいものもあるように思われる。

情報収集努力に影響する可能性がある情報収集方針のもう1つのタイプは、情報収集の終了方針に関するものである。情報収集には限りがないため、どこかで打ち切ろうとするのは消費者として自然なことであろう。そうした情報収集の停止は消費者が自らの情報収集に満足した段階で生じることも考えられる。そして、こうした情報収集終了方針は情報収集努力を一定程度までに抑える方向に働く可能性もある。情報収集終了方針は特に論点2の「情報

表 1 構成要素，下位構成要素，構成概念の対応表

構成要素	下位構成要素	構成概念
情報収集目的	-	適合商品発見信念 後悔回避のための情報収集
情報収集方針	情報収集スタイル	多商品情報収集努力（情報収集の幅） 特定商品情報収集努力（情報収集の深さ） 質重視情報収集志向
	情報収集終了方針	情報収集割り切り志向 満足基準による情報収集停止志向
情報収集結果	感情的評価	情報収集の楽しさ 情報収集の苦痛
	認知的負担	情報過多による判断困難 商品数過多による選択困難 情報収集による決定困難 欠点認知による購入回避傾向

収集努力の逡減効果」を考察する際に重要なものとなると考えられる。情報収集スタイルは情報を収集する段階に関わるものであり、情報収集終了方針は情報収集を終了する段階に関わるものであるという段階の違いはあるものの、それらをまとめた情報収集方針は情報収集努力に影響を及ぼすものであると考えることができる。

情報収集努力と行動満足の関係を考えるにあたっては、両者を媒介するものとして、情報収集行動が完了していなくとも、その途中段階において随時発生し得る、情報収集の結果にも注目する必要がある。情報収集結果として先ず考えられるのが楽しさや苦痛といった感情的な評価である。また、先行研究では情報過負荷が意思決定の質や満足に負の影響を及ぼすことが指摘されており（Inbar, Botti, & Hanko, 2011; Keller & Staelin, 1987; Lee & Lee, 2004）、神経生理学的にも確認されている（Peng, Xu, & Huang, 2021）。そこで本稿では情報収集結果に関し、感情的な評価だけでなく、情報収集によって生じる認知的負担にも着目することにした。こうした認知的負担には様々なタイプのものがあると考えられるため、今回の研究では、情報過多による判断困難、商品数過多による選択困難³⁾、情報収集による決定困難、欠点認知による購入回避傾向の4側面から確認することにした。情報収集結果は情報収集を行っている際に随時発生するものであり、進行中の情報収集の方針にフィードバックされるとともに、そのルートを通じて情報収集努力に影響を及ぼす可能性がある。

表1は以上述べたものを、構成要素，下位構成要素，構成概念という形で整理したものであり、図3はそれらの関係をまとめたものである。情報収集努力と行動満足のみ二重線で囲っているのは、本稿の核となる構成概念であることによる。

今回の考察においては拙稿（2025）における仮説を検証するために実施した消費者調査の

図 3 各構成概念の位置付け

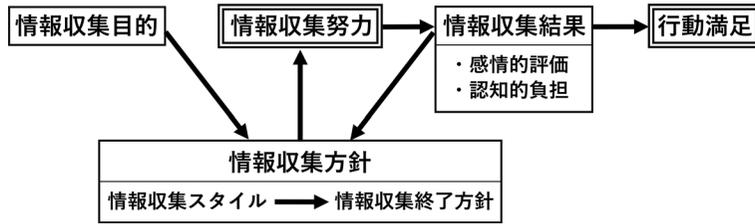


表 2 各構成概念に対応する質問文と記述統計量

構成概念	質問文	平均値	標準偏差
情報収集努力	ワイヤレスイヤホン・ヘッドホンを購入した際の情報収集行動や収集した情報に基づく判断について教えてください／商品に関する情報を積極的に収集した	3.53	1.24
適合商品発見信念	情報を収集すれば自分に適した商品を見つけることができると思った	3.55	1.08
後悔回避のための情報収集	購入後に後悔したくないので情報を収集した	3.62	1.18
多商品情報収集努力 (情報収集の幅)	できるだけ多くの商品についての情報を収集するよう努めた	3.20	1.12
特定商品情報収集努力 (情報収集の深さ)	特定の商品について詳しい情報を収集するよう努めた	3.34	1.11
質重視情報収集志向	情報収集に際しては量よりも質を重視した	3.48	1.01
情報収集割り切り志向	情報収集には限りがないので、ある程度の情報収集で良いと割り切っていた	3.35	1.03
満足基準による情報収集停止志向	自分が満足できると思える商品が見つかったら、さらに良い別の商品を探す必要はないと考えていた	3.35	1.03
情報収集の楽しさ	商品に関する情報の収集は楽しかった	3.31	1.15
情報収集の苦痛	商品に関する情報の収集は苦痛だった	2.66	1.16
情報過多による判断困難	個々の商品に対する情報が多過ぎて個々の商品の良し悪しを判断するのが難しいと感じた	3.43	1.12
商品数過多による選択困難	販売されている商品の数が多過ぎて選びにくいと感じた	3.49	1.15
情報収集による決定困難	情報を収集すればするほど、購入する商品を決定するのが難しくなるように感じた	3.23	1.10
欠点認知による購入回避傾向	情報を集めたことにより、どの商品にも欠点があることが分かり、ワイヤレスイヤホン・ヘッドホンの購入自体をためらう気持ちが生じた	2.74	1.15
行動満足	ワイヤレスイヤホン・ヘッドホンを購入して使用した後のことについて教えてください／ワイヤレスイヤホン・ヘッドホンを選んだ際の自分の行動全般に対して満足している	3.71	0.96

注. 全ての変数について $n=1,200$ である。

情報収集努力の閾値効果と逡減効果：行動満足への影響

データを用いたが、今回利用したデータの中には拙稿（2025）では利用しなかったものも含まれる。調査の概要については拙稿（2025）に記載済みであるが、重要な事項であるためここに改めて記しておく。調査対象品目はワイヤレスイヤホン／ヘッドホンで、質問票は筆者が作成し、株式会社クロス・マーケティングに委託して同社のインターネットモニターを用いたインターネットリサーチを実施した。調査期間は2024年2月26日と27日の2日間である。調査対象者は過去2年以内に自分で使用するために当該品目の製品を購入した経験がある全国の15歳以上69歳以下の男女で、性・年齢による割り付けは行わなかった。合計1,200名から有効回答を得ている。最後に購入した製品について、事前の情報収集努力や事後の行動満足などについて尋ねている。程度を尋ねる設問の回答選択肢では、最低が1点、最高が5点となる5段階尺度を用いている。表2は本稿で対象とする各構成概念について、対応する質問文、回答の平均値と標準偏差をまとめたものである。以上を踏まえ、次章では論点1について考察する。

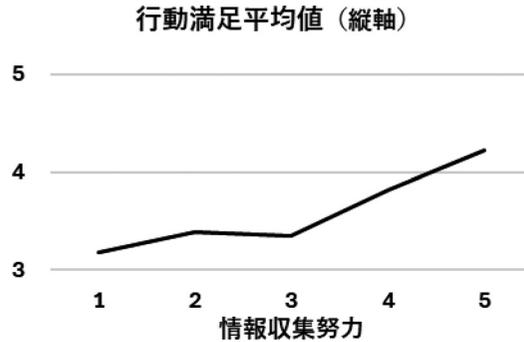
Ⅲ. 論点1「情報収集努力の閾値効果」についての考察

3-1 考察に向けての準備

本章では論点1「情報収集努力が一定水準に達するまで行動満足に明確な効果が見られないのは何故か」、すなわち「情報収集努力の閾値効果」について考察する。拙稿（2025）における一元配置分散分析の結果を表す図4に示されるように、商品に関する情報を積極的に収集した人（情報収集努力に関する質問項目に対する回答値が5段階評価で4以上の人）に関しては、情報収集に積極的であるほど行動満足の水準が高いものの、積極的である程度が「どちらともいえない」レベルまでの範囲の人（回答値が3以下の人）については、行動満足の水準に統計的に有意な差は見られなかった。そこで本章の探索的な考察においては、情報収集努力に関連する様々な要因それぞれについて、情報収集努力⁴⁾と行動満足それぞれを従属変数とする一元配置分散分析を実施して、非線形効果が発生する原因についての示唆を得ることを目指した。但し、一元配置分散分析の結果は本文中に掲載するには量が多いため、巻末に付表としてまとめることにした。本文中では、当該変数についての回答値の水準を横軸にとり、それぞれの回答値に応じた(a)情報収集努力の平均値と(b)行動満足の平均値を縦軸にとった折れ線グラフを2枚セットにして配置し、参照できるようにしている。論点1は情報収集努力の水準が低い消費者から高い消費者までの全体的な状況に関わるものであることから、全標本のデータに基づいて考察する。

なお、縦軸の値がとり得る範囲は1～5であるため、(a)図においては縦軸をその範囲で表示した。一方、行動満足については考察対象とした全ての場合において平均値が中立的な水準を意味する3を超えていたため、行動満足水準の差異を明確に視覚化できるよう、(b)

図 4 「情報収集努力」と「行動満足」の関係



注. 対応する一元配置分散分析の結果については巻末の付表 1 を参照のこと。

図の縦軸の値の範囲は 3~5 で表示した⁵⁾。全ての構成概念についての全ての水準において行動満足の平均値が 3 を超えていたということ自体が特徴的なことである。(a) 図で対象としている情報収集努力については平均値が 3 を下回る場合も少なくないことから、(b) 図で対象としている行動満足の平均値が全ての場合において 3 を超えていることが、回答においてしばしば見られる同意傾向 (acquiescence bias) のみによるものとは考えにくい。自分が関わった行動により発生する認知的不協和を軽減しようとする心理的な作用が消費者の中に生じている可能性が考えられよう。

以下、3-2 節では「情報収集目的」、3-3 節では「情報収集方針」、3-4 節では「情報収集結果 (感情的評価)」、3-5 節では「情報収集結果 (認知的負担)」について、それぞれの影響を考察する。以上の各側面に関する考察を踏まえ、3-6 節では行動満足の規定要因について検討し、3-7 節において論点 1 についての考察を総括する。

3-2 情報収集目的の影響

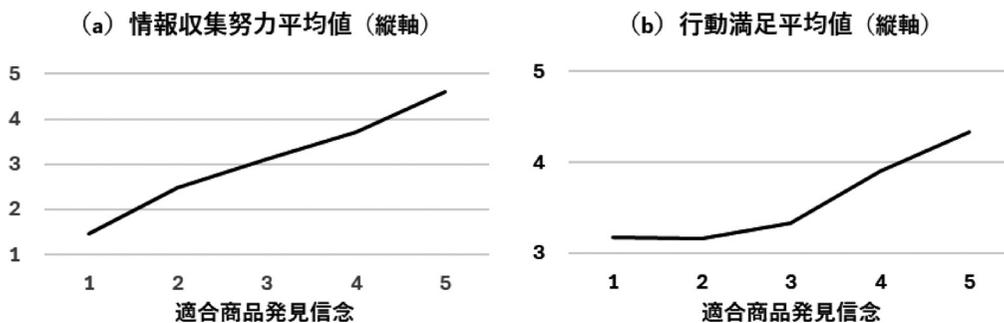
情報収集努力の規定要因にあたりと考えられる情報収集目的に関しては、①肯定的な結果を期待する「適合商品発見信念」と、②否定的な結果の回避を目指す「後悔回避のための情報収集」の両面について、それぞれの影響を確認する。

① 「適合商品発見信念」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係

図 5 (a) に示されているように、適合商品発見信念の水準が高い人ほど、情報収集を積極的に行っている。一方、図 5 (b) に示されているように、適合商品発見信念と行動満足の関係は単純ではなく、適合商品発見信念の水準が「どちらともいえない (回答値 3)」レベルまでは差が無いが、そうした目的を「明確に」もっている人 (回答値 4 以上) については明らかに右上がりとなっている。これは図 4 に示されている情報収集努力と行動満足の関

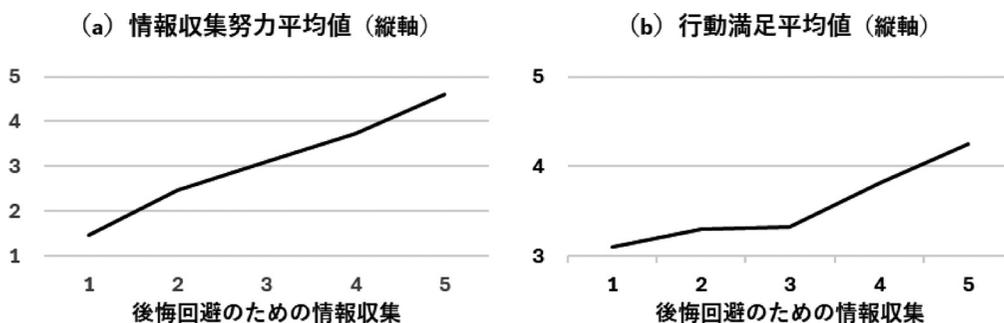
情報収集努力の閾値効果と逡減効果：行動満足への影響

図5 「適合商品発見信念」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係



注. 対応する一元配置分散分析の結果については巻末の付表2を参照のこと。

図6 「後悔回避のための情報収集」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係



注. 対応する一元配置分散分析の結果については巻末の付表3を参照のこと。

係に非常によく似たパターンであることから、そして情報収集目的は情報収集努力に先立つものであると考えられることから、情報収集努力に閾値効果が見られる理由について考える上で注目する必要がある。情報を収集すれば自分に適した商品を見つけることができると思うほど、情報収集に努めるようになるが、単純に「情報収集に努めたから行動満足の水準が高まった」というよりも、「情報を収集すれば自分に適した商品を見つけることができると思ったから情報収集に努めた」といった、情報収集に関する明確な目的意識の存在こそが行動満足の水準を高めている可能性があるように思われる。

② 「後悔回避のための情報収集」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係

図6 (a) に示されているように、後悔を回避する目的で情報収集を行う人ほど情報収集を積極的に行う傾向にあるが、図6 (b) に示されているように、後悔回避目的を「明確に」もつ人（回答値4以上）に限って、それが明確であるほど行動満足の水準は高い。購入後の後悔回避を目的に情報を収集する人ほど、情報収集に努めるようになるが、単純に「情報収集に努めたから行動満足の水準が高まった」というよりも、「購入後に後悔したくないので

情報収集に努めた」というような、情報収集に関する明確な目的意識の存在こそが行動満足の水準を高めている可能性があるように思われる。

以上の①と②を踏まえ、情報収集努力に閾値効果が見られる理由について考えてみる。肯定的な結果を期待する「適合商品発見信念」と、否定的な結果の回避を目指す「後悔回避のための情報収集」では、情報収集目的に方向性の違いがあるが、両者の情報収集努力や行動満足への影響パターンは似ている。一定レベル以上の情報収集努力を引き出すに足るほど、「情報を収集すれば自分に適した商品を見つけられる」といった肯定的な結果を追求する情報収集目的や、「購入後に後悔したくない」といった否定的な結果を回避しようとする情報収集目的を「明確に」もった上で、「実際に情報収集を十分に行い」、それによって生じる「そうした目的を十分に達成できたという感覚を得ること」こそが、行動満足の水準を高めるために必要の条件となっている可能性がある。

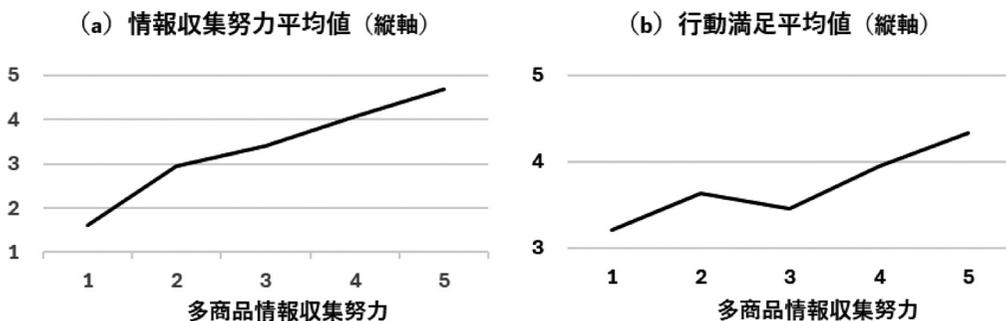
3-3 情報収集方針の影響

情報収集方針には情報収集スタイルと情報収集終了方針に関するものが想定される。まず、情報収集スタイルについては、情報収集努力と正の関係をもつ可能性があるものとして、①多商品情報収集努力と②特定商品情報収集努力を、正負両方の関係をもつ可能性があるものとして、③質重視情報収集志向を取り上げる。続いて、情報収集終了方針に関して、④情報収集割り切り志向と⑤満足基準による情報収集停止志向を取り上げる。④と⑤は情報収集努力と負の関係をもつ可能性があるものであり、それ故、後述の論点2とも関係するものである。以下において①～⑤それぞれについてデータを確認することにする。

① 「多商品情報収集努力」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係

図7 (a) が示す通り、多くの商品についての情報を収集しようと努める人は情報収集を

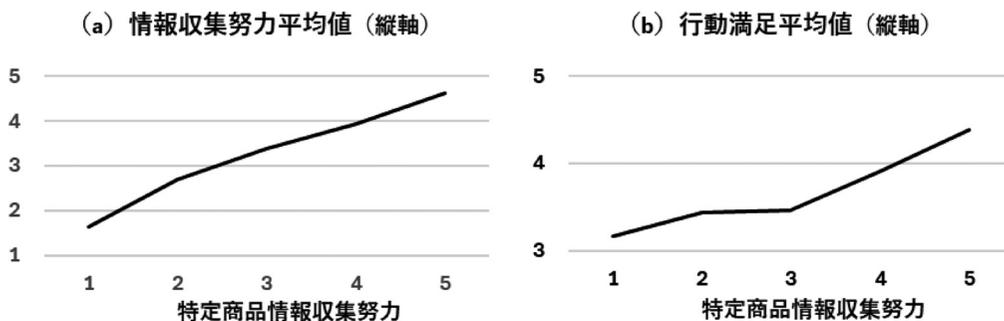
図7 「多商品情報収集努力」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係



注. 対応する一元配置分散分析の結果については巻末の付表4を参照のこと。

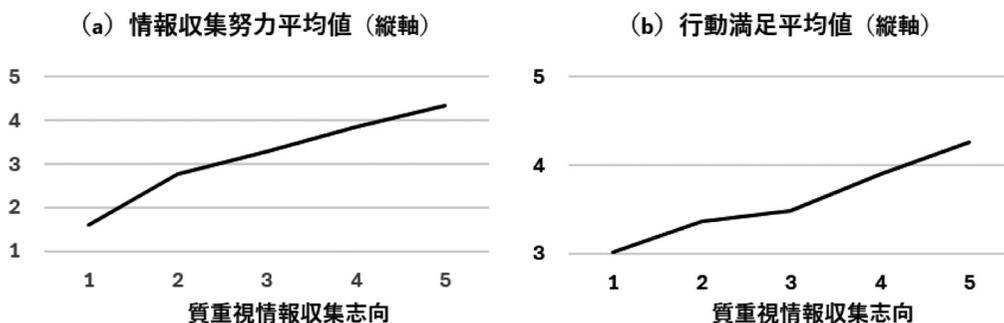
情報収集努力の閾値効果と逡減効果：行動満足への影響

図8 「特定商品情報収集努力」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係



注. 対応する一元配置分散分析の結果については巻末の付表5を参照のこと。

図9 「質重視情報収集志向」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係



注. 対応する一元配置分散分析の結果については巻末の付表6を参照のこと。

積極的に行う傾向が強い。そして図7 (b) が示すように、そうした情報収集方針を明確に意識して採用する (回答値4以上) 人については、そうした意識が明確であればあるほど行動満足の水準は高い。

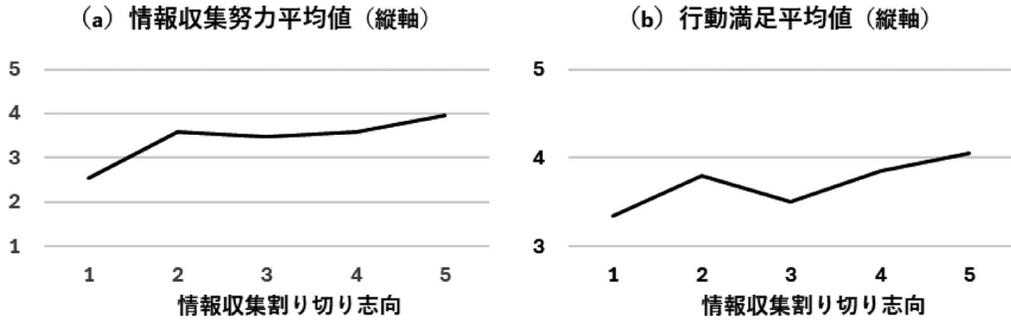
② 「特定商品情報収集努力」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係

図8 (a) が示す通り、特定の商品について詳しい情報を収集しよう努める人は情報収集を積極的に行う傾向が強い。そして図8 (b) が示すように、そうした情報収集方針を明確に意識して採用する (回答値4以上) 人については、そうした意識が明確であるほど行動満足の水準は高い。

③ 「質重視情報収集志向」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係

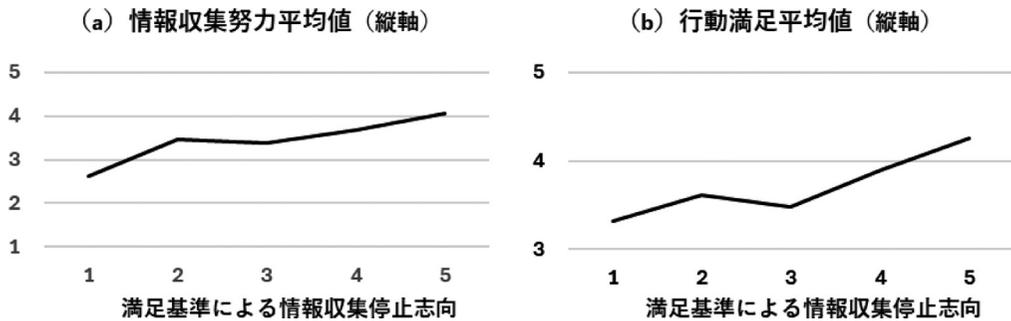
質重視情報収集志向は情報収集努力に対して正負両方の影響を及ぼす可能性があるように思われるが、図9 (a) が示す通り、そうした情報収集方針を採用する人は情報収集を積極的に行う人であることが多い。そして図9 (b) が示すように、そうした情報収集方針を明確に採用する人ほど行動満足は高いが、閾値効果についてはさほど明瞭ではない。

図 10 「情報収集割り切り志向」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係



注. 対応する一元配置分散分析の結果については巻末の付表 7 を参照のこと。

図 11 「満足基準による情報収集停止志向」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係



注. 対応する一元配置分散分析の結果については巻末の付表 8 を参照のこと。

④ 「情報収集割り切り志向」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係

情報収集割り切り志向は情報収集努力に負の影響を及ぼすことが想定された。しかし、図 10 (a) の折れ線は明白な右上がりにこそなっていないものの、情報収集割り切り志向が強い人は実際には情報収集をある程度積極的に行う人であることが多いといえる。そして図 10 (b) が示すように、情報収集割り切り志向を有する人の行動満足の水準は顕著に高いとまではいえないもの、決して低くはない。

⑤ 「満足基準による情報収集停止志向」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係

満足基準による情報収集停止志向も情報収集努力に負の影響を及ぼすことが想定されたが、図 11 (a) が示す通り、そうした情報収集方針を採用する人は実際には情報収集をある程度積極的に行う人であることが多い。一方、図 11 (b) が示すように、そうした情報収集方針を明確に意識している人（回答値 4 以上）については、その意識が明確であるほど行動満足の水準は高い。「情報収集割り切り志向」における満足基準は製品満足に関わるものであることから、製品満足と行動満足の間密接な関係があることを示唆する結果とみなすことも可能であろう。

情報収集努力の閾値効果と逡減効果：行動満足への影響

以上のように、情報収集方針には情報収集努力に正の影響を及ぼすと想定されたものから負の影響を及ぼすと想定されたものまであったものの、今回のデータからは明確に負の影響を及ぼすとみなされるものは見当たらなかった。情報収集努力への影響以上に注目する必要があるのは、行動満足への影響である。どのような情報収集方針であれ、その方針を一定程度以上明確に意識している場合には、それが明確であるほど行動満足の水準が高い傾向が見られた。但し、情報収集方針は情報収集目的の影響を受けるものであることから、そうした傾向について単純に情報収集方針の影響と判断してしまうのではなく、3-2節で考察した情報収集目的を明確に意識していることの影響とセットで把握する必要があると考えられる。

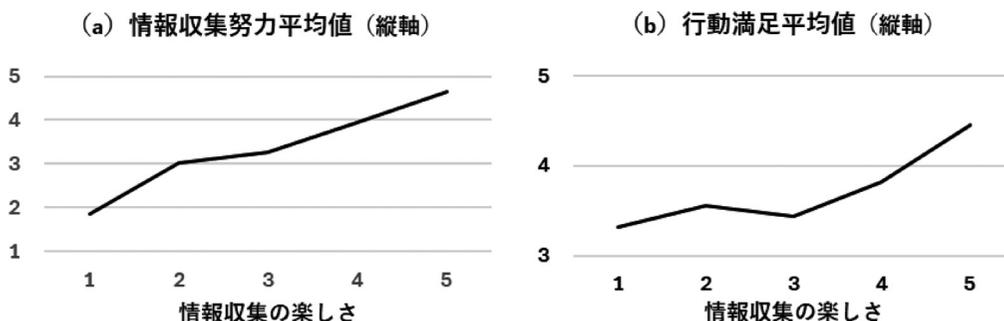
3-4 情報収集結果（感情的評価）の影響

情報収集の結果として生じる感情に関しては、肯定的な感情である「情報収集の楽しさ」、否定的な感情である「商品情報の苦痛」の順に、その影響を考察する。

① 「情報収集の楽しさ」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係

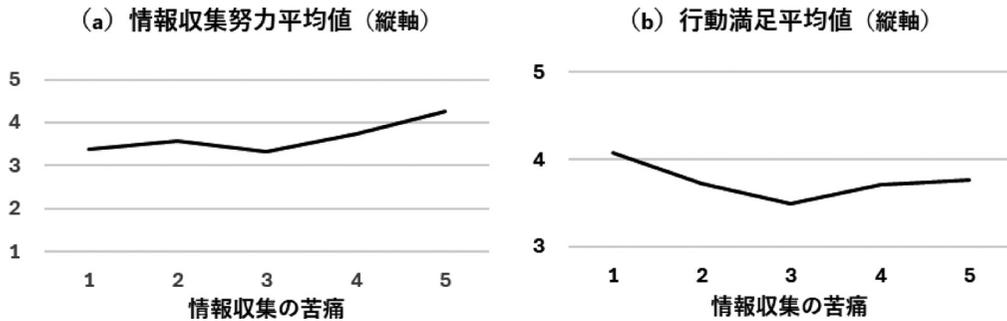
図12(a)に示されているように、商品に関する情報の収集が楽しいと感じる人ほど、情報収集を積極的に行う傾向にある。そうした感情は情報収集の結果ではあるが、情報収集方針や情報収集努力にフィードバックがあり、楽しいからさらに情報を収集するという繋がりもあると考えられる。一方、図12(b)に示されているように、そうした正の感情の行動満足への影響には閾値効果が見られ、楽しかった程度が中立的なレベル（回答値3）まではそれほど差が無いが、そうした感情を「明確に」もっている場合（回答値4以上）には明らかに右上がりとなっている。これは図4に示されている情報収集努力と行動満足の関係と非常によく似たパターンである。商品に関する情報の収集が楽しいと感じる人は、情報収集に努めていることが多いが、単純に情報収集に努めたから行動満足が高まったというよりも、3-2節で考察した情報収集目的や、3-3節で考察した情報収集方針を明確に意識していることが、情報収集

図12 「情報収集の楽しさ」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係



注. 対応する一元配置分散分析の結果については巻末の付表9を参照のこと。

図 13 「情報収集の苦痛」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係



注. 対応する一元配置分散分析の結果については巻末の付表 10 を参照のこと。

の楽しさに繋がり、それが行動満足を高めているという可能性もあるように思われる。

② 「情報収集の苦痛」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係

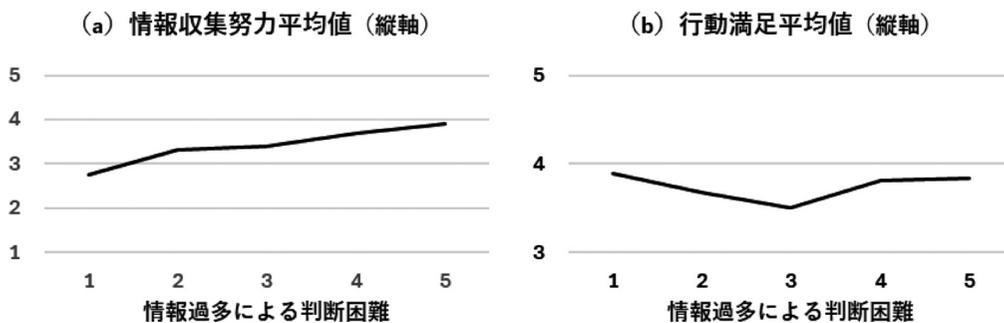
図 13 (a) が示す通り、商品に関する情報の収集に苦痛を感じる人は情報収集に努めていることが多いようである。この点を因果関係という観点から考えた場合、情報収集努力の大きさが原因となって、結果として苦痛を感じたと考えるのが自然であろう。但し、図 13 (b) が示す通り、苦痛がある程度以上になると、苦痛の程度の上昇に応じた行動満足の低下は見られない。このデータだけからではその理由について明確なことはいえないが、1つの可能性として、情報収集に苦痛を感じる人は情報収集目的を明確にもっているが故に情報収集努力を払う人であり、苦痛であったとしてもそれは当然必要なこととして割り切っており、むしろ目的達成のために必要な努力をきちんと払ったという点での自己評価の高さが、行動満足の低下に歯止めをかけているということが考えられる。

情報収集結果（感情的評価）の影響に関しては、「情報収集の楽しさ」のような肯定的な感情の場合と「情報収集の苦痛」のような否定的な感情の場合では行動満足への影響パターンに違いが見られる。しかしながら、前者の場合にはその水準が高い範囲において行動満足への正の影響が顕著となり、後者の場合にはその水準が高い範囲において行動満足への負の影響が下げ止まるなど、情報収集努力の閾値効果を考える上で注目すべき特徴がある点を確認することができた。但し、情報収集結果（感情的評価）の影響に関しても、それに先立つ情報収集目的や情報収集方針との関係を踏まえた理解が求められるといえよう。

3-5 情報収集結果（認知的負担）の影響

情報収集行動の結果（認知的負担）に関しては、情報過多による判断困難、商品数過多による選択困難、情報収集による決定困難、欠点認知による購入回避傾向の順に、その影響に

図 14 「情報過多による判断困難」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係



注. 対応する一元配置分散分析の結果については巻末の付表 11 を参照のこと。

ついて考察する。

① 「情報過多による判断困難」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係

図 14 (a) が示す通り、個々の商品についての情報が多過ぎて各商品の良し悪しを判断するのが難しいと感じる人ほど、情報収集を積極的に行う傾向がある。この点を因果関係という観点から考えた場合、情報収集努力の大きさが原因となって、結果として個々の商品に対する情報が多過ぎることになり、各商品の良し悪しを判断するのが難しいと感じるに至ると考えるのが自然であろう。図 14 (b) が示すように、情報過多による判断困難を感じた人と感じなかった人はいずれも行動満足の水準が高く、その中間に位置する回答値 3 レベルの人の行動満足の水準は低い。これは、3-4 節で考察した情報収集の結果（感情的評価）のうち、「情報収集の苦痛」のような否定的な感情の場合と似たパターンであり、共通のメカニズムにより生じている可能性がある。

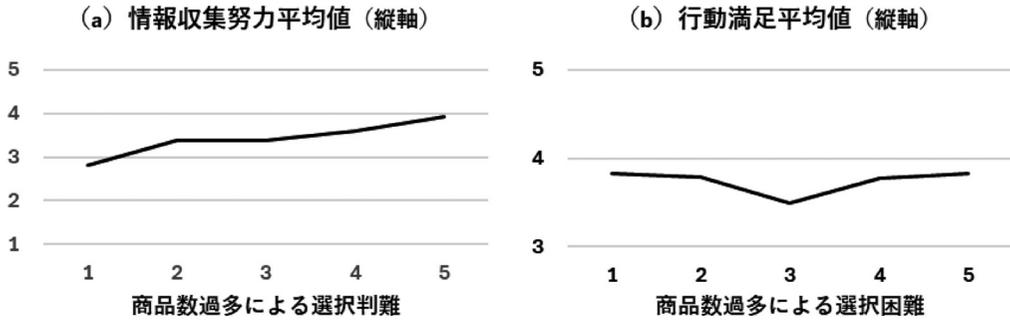
② 「商品数過多による選択困難」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係

図 15 (a) には、販売されている商品の数が多過ぎて選びにくいと感じる人ほど情報収集努力を積極的に行っている傾向が示されている。因果関係の観点からは、情報収集努力の大きさが原因となって、結果として販売されている商品の数が多過ぎて選びにくいと感じることになったと考えるのが自然であろう。一方、図 15 (b) が示すように、商品数過多による選択困難を感じた人と感じなかった人はいずれも行動満足の水準が高く、その中間に位置する回答値 3 レベルの人の行動満足の水準は低い。①とパターンは似ている。

③ 「情報収集による決定困難」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係

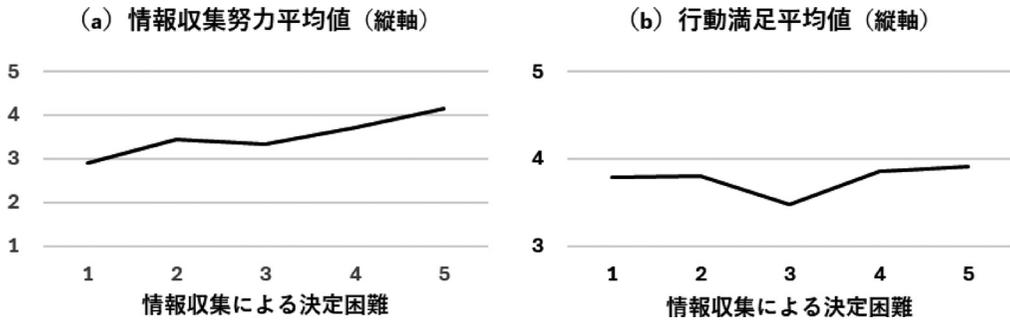
図 16 (a) が示す通り、情報を収集すればするほど、購入する商品を決定するのが難しくなると感じる人ほど積極的に情報を収集している。この点を因果関係という観点から考えた場合、

図 15 「商品数過多による選択困難」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係



注. 対応する一元配置分散分析の結果については巻末の付表 12 を参照のこと。

図 16 「情報収集による決定困難」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係



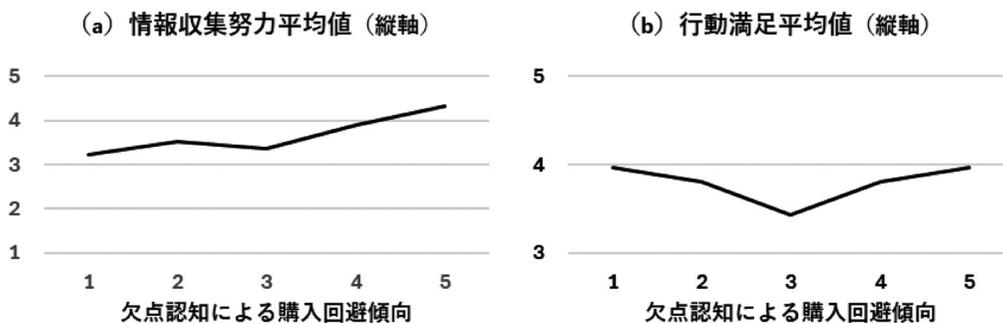
注. 対応する一元配置分散分析の結果については巻末の付表 13 を参照のこと。

情報収集努力の大きさが原因となって、情報を収集すればするほど、購入する商品を決めるのが難しくなるように感じると考えるのが自然であろう。一方、図 16 (b) が示すように、そのように感じた人と感じなかった人の行動満足の水準はいずれも高く、その中間に位置する回答値 3 レベルの人の行動満足の水準は低い。そのパターンは①②とよく似ている。

④ 「欠点認知による購入回避傾向」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係

図 17 (a) が示す通り、情報を集めたことにより、どの商品にも欠点があることが分かり、ワイヤレスイヤホン・ヘッドホンの購入自体をためらう気持ちが生じた人ほど、情報収集努力を積極的に行っていたことが多いようである。この点を因果関係という観点から考えた場合、情報収集努力の大きさが原因となって、結果としてどの商品にも欠点があることが分かり、ワイヤレスイヤホン・ヘッドホンの購入自体をためらう気持ちが生じたと考えるのが自然であろう。一方、図 17 (b) が示すように、そのように感じた人と感じなかった人はいずれも行動満足の水準が高く、その中間に位置する回答値 3 レベルの人の行動満足の水準が最も低い、V 字型のパターンとなっている。このパターンは①②③と似ているといえよう。

図 17 「欠点認知による購入回避傾向」と「情報収集努力」・「行動満足」の関係



注. 対応する一元配置分散分析の結果については巻末の付表 14 を参照のこと。

以上、情報収集結果（認知的負担）の影響について4つの側面から確認した。いずれも情報収集努力を抑える方向でのフィードバックをもたらす可能性がある認知的負担であるが、行動満足との関係についてはいずれもV字型であり、そのパターンは3-4節で考察した「情報収集の苦痛」のような否定的な感情と共通性をもつものであるといえることができる。情報収集結果（認知的負担）に関しては、水準の面で中間に位置する回答値3レベルを境にして行動満足との関係に違いが見られることから、情報収集努力の閾値効果を考える上で注意を払う必要がある。但し、情報収集結果（感情的評価）同様、情報収集結果（認知的負担）の影響に関しても、それに先立つ情報収集目的や情報収集方針との関係を踏まえた理解が求められるといえよう。

3-6 行動満足の規定要因

前節までの考察を通じて情報収集努力の閾値効果には、起点となる「情報収集に関する明確な目的意識」の有無が重要な役割を担っている可能性があることを確認した。但し、行動満足に負の影響を及ぼす可能性がある要因については、やや複雑な機能を果たしている可能性があるといえる。様々な要因は複雑に絡み合っており、各要因について個別に考察するだけでは全体像が把握しにくいという問題もある。そこで本節では、行動満足を従属変数、情報収集努力を除く各変数を独立変数とする段階的回帰分析を実施し、その結果に基づいて行動満足の規定要因について考察することにする。情報収集努力が行動満足に及ぼす効果が非線形的であることを踏まえると、情報収集努力の水準が低位の場合と高位の場合で影響力をもつ要因が異なる可能性も十分に考えられる。そこで段階的回帰分析に関しては、全標本についての分析に加えて、情報収集努力の水準が1から3の場合と、3から5の場合、それぞれについての分析も行うことにした。

表3は情報収集努力の水準が1から5までの全ての回答者についての分析結果である。最終モデルには、情報収集目的、情報収集方針（情報収集スタイル、情報収集終了方針）、情

表 3 行動満足に従属変数とする段階的回帰分析の結果（情報探索努力の水準：1～5）

Step	投入変数	R^2	Adj. R^2	ΔR^2	F 変化	\hat{p} (F 変化)	β	t	p
1	適合商品発見信念	.165	.165	-	237.48	<.001	0.15	3.78	<.001
2	情報収集の苦痛	.192	.190	.026	141.97	<.001	-0.15	-5.53	<.001
3	質重視情報収集志向	.219	.217	.027	111.80	<.001	0.12	3.60	<.001
4	満足基準による情報収集停止志向	.234	.231	.015	91.11	<.001	0.14	5.06	<.001
5	後悔回避のための情報収集	.248	.245	.014	78.74	<.001	0.12	3.17	.002
6	欠点認知による購入回避傾向	.259	.255	.011	69.37	<.001	-0.14	-4.84	<.001
7	特定商品情報収集努力	.263	.259	.005	60.87	<.001	0.08	2.37	.018
8	多商品情報収集努力	.267	.262	.003	54.13	<.001	0.08	2.32	.021

注. R^2 , Adj. R^2 , ΔR^2 は各ステップの決定係数。 β , t , p は最終モデルの値を示す。
Step 1 の F 値および p 値 (F 変化) は全体モデルの有意性, Step 2 以降は F 変化 (ΔF) および p 値 (F 変化) を示す。
 $n=1,200$.

表 4 行動満足に従属変数とする段階的回帰分析の結果（情報探索努力の水準：1～3）

Step	投入変数	R^2	Adj. R^2	ΔR^2	F 変化	\hat{p} (F 変化)	β	t	p
1	満足基準による情報収集停止志向	.078	.076	-	40.93	<.001	0.17	3.22	.001
2	質重視情報収集志向	.104	.100	.026	28.07	<.001	0.19	3.86	<.001
3	情報収集の苦痛	.130	.124	.026	23.99	<.001	-0.18	-4.04	.000
4	情報収集割り切り志向	.138	.131	.009	19.33	<.001	0.12	2.18	.029

注. R^2 , Adj. R^2 , ΔR^2 は各ステップの決定係数。 β , t , p は最終モデルの値を示す。
Step 1 の F 値および p 値 (F 変化) は全体モデルの有意性, Step 2 以降は F 変化 (ΔF) および p 値 (F 変化) を示す。
 $n=487$.

報収集結果（感情的評価，認知的負担）など様々な構成要素に関わる変数が組み入れられ，規定要因の全体的な特徴が分かりにくい状態となっている。

表 4 は情報収集努力の水準が 1 から 3 までの回答者についての分析結果である。情報収集努力が低い水準においては，情報収集終了方針を明確にし，情報過負荷を回避し苦痛を軽減することが，行動満足を高める上で有用であるように思われる。但し，最終モデルに投入された変数が少なく，決定係数も低いことから，行動満足の水準を上げるという観点からは決め手が乏しい状況ということもできよう。後述の表 5 とは異なり，情報収集目的に関する変数がモデルに導入されていない。情報収集努力水準がそれほど高くはない水準においては情報収集目的もそれほど明確ではないことが多いと考えられるが，そうした場合には情報収集目的が少々明確になったとしても，行動満足を引き上げる効果は大きくなさそうである。

表 5 は情報収集努力の水準が 3 から 5 までの回答者についての分析結果である。Step 1 と Step 2 で情報収集目的に関する両変数がモデルに導入され，最終モデルにおいても両変数の β の絶対値は他変数よりも大きい。図 4 で確認した通り，情報収集努力が高い領域においては情報収集努力の水準が高いほど行動満足の水準も高いが，3-2 節で考察したように，情報

表5 行動満足を従属変数とする段階的回帰分析の結果（情報探索努力の水準：3～5）

Step	投入変数	R^2	Adj. R^2	ΔR^2	F 変化	\hat{p} (F 変化)	β	t	p
1	適合商品発見信念	.182	.181	-	209.91	<.001	0.18	4.64	<.001
2	後悔回避のための情報収集	.214	.212	.031	127.80	<.001	0.17	4.70	<.001
3	情報収集の苦痛	.242	.239	.028	99.81	<.001	-0.11	-3.27	.001
4	質重視情報収集志向	.259	.256	.018	82.09	<.001	0.11	3.37	.001
5	満足基準による情報収集停止志向	.269	.265	.010	68.98	<.001	0.12	4.06	<.001
6	欠点認知による購入回避傾向	.281	.276	.012	61.06	<.001	-0.15	-4.59	<.001
7	情報収集の楽しさ	.287	.281	.006	53.72	<.001	0.07	2.18	.029
8	多商品情報収集努力	.290	.284	.004	47.77	<.001	0.07	2.15	.032

注. R^2 , Adj. R^2 , ΔR^2 は各ステップの決定係数。 β , t, p は最終モデルの値を示す。
Step 1 の F 値および p 値 (F 変化) は全体モデルの有意性, Step 2 以降は F 変化 (ΔF) および p 値 (F 変化) を示す。
n = 944.

収集努力そのものよりもその前提となっている情報収集目的の明確さが行動満足の水準を高めている可能性がある。表5に示されている分析結果はそうした可能性を別の角度から示唆しているといえよう。

3-7 論点1「情報収集努力の閾値効果」に関する考察のまとめ

3-2節から3-5節では各構成概念と情報収集努力・行動満足の関係について個別に確認し考察したが、情報収集努力と正の関係をもつ構成概念に関しては、行動満足に対する効果に閾値が存在するケースが多いことが判明した。すなわち、それらの構成概念に対応する変数において、回答値が5段階評価の3までの水準である場合には行動満足への正の貢献が乏しく、それを超えると行動満身に明確に正の効果をもたらすことが多い。中でも特に注目する必要がある構成要素は、図3において起点に位置する情報収集目的である。この段階で既に閾値効果が見られるということは、そこで見られる閾値効果の存在が、それ以降の段階における閾値効果の存在に決定的な役割を果たしている可能性があることを示している。さらに、3-6節における段階的回帰分析の結果からも、情報収集努力の水準が高い場合に、情報収集目的の明確さが行動満足の水準を高くすることが確認された。情報収集努力の水準は情報収集目的の明確さによって影響を受けることを考えると、情報収集目的の明確さが一定水準を超えると、それが行動満足を高めるように働くというメカニズムが根底にあることが考えられる。そして、もしそうであれば、情報収集目的の明確さの閾値効果が情報収集努力の閾値効果を規定している可能性があることになる。

一方、3-4節で考察した情報収集結果（感情的評価）のうちの情報収集行動の苦痛や3-5節で考察した情報収集結果（認知的負担）のように、行動満身に負の影響を及ぼすと想定していた構成概念に関しては、回答値3までの水準では想定通り負の関係が見られたものの、

それを超えると逆に正の影響を及ぼしているように見える。この点は情報収集努力の閾値効果を理解する上で特に重要であろう。認知的負担や負の感情的評価が顕著であるにもかかわらず行動満足の水準が高いという現象は何故生じるのであろうか。今回の分析結果から考えられる可能性としては、そうした消費者は、たとえ情報収集に努めることによって苦痛が生じたり、情報過負荷が意思決定に困難をもたらしたりしたとしても、それらは当然必要なこととして割り切り、むしろそれは目的達成のために必要な努力をしっかりと払った証しであるという肯定的な受け止め方をするが故に、行動満足の水準が高いということが考えられる。

以上の2つのポイントに基づき、情報収集努力が行動満足に及ぼす非線形効果のうち、情報収集努力の閾値効果が見られる理由についての考察をまとめる。情報収集努力が一定の水準に至るまで行動満足が高まらない理由としては以下の2つが考えられる。1つは、情報収集目的や情報収集方針についての明確な意識が欠けていると、自分の行動に対する積極的な評価ができないと考えられるという点である。もう1つは、情報収集努力が一定の水準に至るまでは「情報収集に努めること自体から生じる苦痛」や「情報収集努力の結果として生じる認知的負担」が行動満足に負の影響を及ぼしてしまうと考えられる点である。一定水準を超えるとそれらは必要な努力の証しとしてむしろ正の影響を及ぼすが、それは情報収集目的の十分な明確さによって支えられている可能性がある。以上の2点を踏まえると、情報収集目的に対する十分に明確な意識が自らの行動に対する評価の基盤を作り、仮にそれが情報収集努力による労苦や選択上の悩みに繋がるものであったとしても、必要な行動をやり遂げたという自己評価の高さに繋がり、高水準の行動満足を生み出している可能性がある。一方、情報収集にある程度努めたとしても、そうした基盤ができないレベルの意識に基づく努力である場合には行動満足に繋がりにくいため、閾値が存在するように観察されるということが考えられる。

IV. 論点2「情報収集努力の逡減効果」についての考察

本章では論点2「情報収集努力の逡減効果」、すなわち「情報収集努力が高水準に達すると、行動満足に対する効果は逡減するのか」という論点について考察する。拙稿(2025)の分析結果からは、同稿の仮説2や仮説3で提示した「情報収集努力の増加による満足の向上は逡減的である」という関係を捉えることはできず、図2のような代替案を提示した。図2の代替案では、灰色背景となっている分析結果の範囲からは支持されなかったものの、それを超えた領域に、先行研究に基づく理論的な考察から導かれる情報収集努力の逡減効果が存在するであろうことを想定している。前回の分析では情報収集努力を「ワイヤレスイヤホン・ヘッドホンを購入した際の情報収集行動や収集した情報に基づく判断について教えてください。／商品に関する情報を積極的に収集した」という5段階尺度で測定した質問のみで捉えてい

たため、同質問項目に対する回答値が5の回答者の中に混在していると思われる満足者と最大化追求者の識別ができていなかった。最大化追求者は情報収集努力の面で満足者よりも徹底していると想定される。そこで両者を識別することによって、情報収集努力が高い水準の消費者間においても、情報収集努力は行動満足に対して正の影響を及ぼしているのか否かを確認し、情報収集努力の逡減効果に関する示唆を得ることとしたい。

5段階尺度で測定した情報収集努力の水準を問う質問に対する回答のみによって満足者と最大化追求者を識別することができないとすると、いかにして両者を識別すれば良いのであろうか。そこで重要となるのが、3-3節の情報収集終了方針の項で取り上げた「情報収集割り切り志向」と「満足基準による情報収集停止志向」である。これらの構成概念に対応する2変数は、いずれも満足者の思考様式を的確に反映していると考えられることから、以下では便宜的に両者を総称して「満足者指標」と呼ぶことにする。今回の探索的研究においては、最大化追求者という概念の特徴を踏まえ、最大化追求者は情報収集努力を尋ねた質問に対する回答が5の回答者287名のうち、満足者指標である「情報収集割り切り志向」と「満足基準による情報収集停止志向」に関する回答値がともに1の回答者に限られるとみなすことにした。287名の両質問項目に対する回答値間の相関係数は.48 ($p < .001$)である。両質問項目それぞれに対する回答値が1の回答者はいずれも22名であり、その時点で既にごく少数であるといえるが、両質問項目に対する回答値がともに1の回答者は10名のみであった。前稿末尾の残された課題の項では、「最大化追求者のようなタイプの消費者は本当にごく少数なのか」について確認する必要があることを指摘した。今回の判断基準に基づくならば、最大化追求者は10名であり、全回答者1200名のうち0.8%を占めるに過ぎず、ごく限られた消費者であるということができる。

最大化追求者の数が極めて少ないことから、最大化追求者と満足者それぞれの行動満足について平均値の差を検定する意義は乏しい。本稿では最大化追求者や満足者という概念は典型的なタイプを表す理念的なものであるとみなし、消費者を最大化追求者と満足者というラベルの下に二分してしまう代わりに、満足者指標に関する程度の違いとして捉えることが適切であると判断した。以上の判断から、論点2の考察にあたっては、標本を上述の287名に限った上で、満足者指標（「情報収集割り切り志向」と「満足基準による探索停止志向」）と他設問の回答値の相関係数を確認することにした。表6はその一覧表である。

まず注目する必要があるのは表6最下行の行動満足との相関係数である。図4に示されているように、商品に関する情報を積極的に収集した人ほど行動満足の水準は高いが、表6最下行の行動満足との相関係数は、満足者指標と行動満足の水準の間に関係があることを支持する結果とはなっていない。その原因に関する示唆を得るために、満足者指標と行動満足以外の変数の相関係数を確認する。満足者は、行動満足を下げる可能性がある「情報収集に伴う負の感情や認知的負担」を感じがちであることが分かる。一方で満足者は行動満足を高め

表 6 満足者指標と他変数の相関係数

	情報収集割り切り志向	満足基準による情報収集停止志向
適合商品発見信念	.16**	.23***
後悔回避のための情報収集	.12*	.19**
多商品情報収集努力	.10	.10
特定商品情報収集努力	.26***	.31***
質重視情報収集志向 (情報収集割り切り志向)	.24***	.28***
(満足基準による情報収集停止志向)	.48***	—
情報収集の楽しさ	.14*	.17**
情報収集の苦痛	.31***	.27***
情報過多による判断困難	.25***	.21***
商品数過多による選択困難	.28***	.18**
情報収集による決定困難	.41***	.19**
欠点認知による購入回避傾向	.37***	.32***
行動満足	.02	.10

注. * $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$. $n = 287$.

る可能性がある「情報収集目的を明確に意識する」傾向があり、また特定の商品に絞った質の高い情報の収集を行う傾向もある。満足者指標と行動満足の間には明確な関係が見られないのは、こうした両側面があることが原因であると考えられる。

満足者が最大化追求者よりも情報収集に伴う負の感情や認知的負担を感じ易いとすれば、それは情報収集努力に制約を設ける動機となる。今回の考察においては満足者と最大化追求者の情報収集努力の水準について直接的な比較はできていないが、満足者指標の内容からして、後者が前者よりも多くの情報収集努力を払うと考えるのは自然なことであろう。但し、満足者が情報収集の結果としての負の感情や認知的負担を感じがちであったとしても、前章で考察したように、情報収集目的を明確にもつ傾向にあることが、必要な行動をやり遂げたという自己評価の高さに繋がり、それが高水準の行動満足を生み出しているということも考えられる。一方、最大化追求者は情報収集目的が満足者ほど明確ではないために、限度なく情報収集を続けているということも考えられる。こうしたことから、満足者は最大化追求者に比べて情報収集努力に制限がかかり易いが、行動満足の水準は同じように高いといった状況が生じている可能性がある。前章における考察を通じて、情報収集目的を明確にもつことが行動満足に繋がる可能性が示唆されたが、本章における考察からも同様のことが示唆されたといえよう。

V. まとめと今後の課題

本稿では「購買前の情報収集努力が購買後の行動満足に及ぼす非線形的効果」が図 2 で示されるようなものと考えて良いのか否かについて、その理由も含めた手掛かりを得るために、

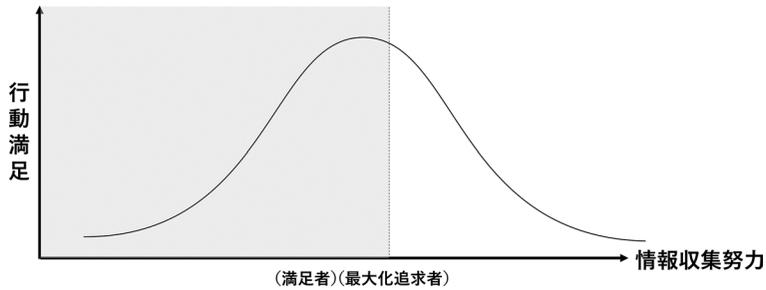
「情報収集努力が一定水準に達するまで行動満足に明確な効果が見られないのは何故か」、
「情報収集努力が高水準に達すると、行動満足に対する効果は逡減するのか」の2つを論点
として設定し、拙稿（2025）で使用した消費者調査データを用いて探索的に考察した。

前者の情報収集努力の閾値効果についてはⅢ章において考察した。情報収集目的に対する十分に明確な意識は、情報収集努力へと繋がり、それが肯定的な自己評価へと結び付くこと
によって、行動満足に繋がり易いことが考えられる。一方、情報収集努力は情報収集に伴う
苦痛や認知的負担にも繋がり易く、苦痛や認知的負担が中程度までの範囲では行動満足に負
の影響を及ぼす側面がある。しかし、そうした苦痛や認知的負担を強く感じている人の行動
満足の水準は逆に高い。これは、そうした状況というのは、消費者が情報収集目的に対する
意識を十分に明確にもっている場合であることが多く、苦痛や認知的負担が生じたとしても、
必要な情報収集をやり遂げたという自己評価の高さの方が行動満足に大きな影響力をもっ
ているからである可能性がある。すなわち、情報収集目的に対する意識の明確さが低い段階で
は情報収集努力に伴う負の側面が強く出易く、行動満足が上がりにくい一方、それが十分に
高い段階に至ると、そうしたことよりも「目的を着実に遂行した」といった自己評価の高さ
が行動満足を上げる効果の方が大きい可能性があることになる。そしてもしそうであれば、
それが情報収集努力に閾値効果が認められる原因ということになる。

一方、情報収集努力の逡減効果についてはⅣ章において考察した。まず、情報収集努力を
払うことを惜しまない最大化追求者はごく少数であることを確認した。このため、最大化追
求者の行動満足の水準と、情報収集努力に制限をかける思考様式をもつ満足者の行動満足の
水準については、標本数の関係から平均値の差を直接検証することはできなかった。しかし、
満足者指標と行動満足の間のカラ係数が統計的に有意でなかったことから、最大化追求者の
方が満足者よりも行動満足の水準が高いとは言い難いことが明らかとなった。図4に示され
ているように、回答者全体の傾向からは、閾値を超えると情報収集努力をより多く払うこと
によって行動満足の水準が上がると思われるものの、最大化追求者のように情報収集努力
を惜しみなく投入する思考様式がさらなる高い水準の行動満足を生み出すとはいえないとい
うことになる。情報収集努力の行動満足に対する効果は逡減し、飽和に達する可能性がある
ということである。すなわち、本稿における考察の結果を踏まえると、拙稿（2025）では確
認できなかった情報収集努力の逡減効果が存在する可能性は十分にあると考えられる。なお、
本稿において使用したデータの範囲からは、情報収集努力の水準が非常に高い場合に、行動
満足の水準が低下に転じるということまで示唆する結果は得られていない。

情報収集努力に閾値効果と逡減効果の両方が見られることに関して1つの可能性として考
えられるのが、満足という概念の特徴である。岡澤・竹橋（2023）は、最大化は客観的な評
価から一番良いものを求める考え方であるのに対して、満足化は主観的な評価が基準となる
ため、満足度や後悔といった主観的な感情経験を評価対象とする場合については、満足化の

図 18 分析結果に基づく情報収集努力と行動満足に関する代替案



注. 多くの消費者は灰色の領域に位置することを想定

方が評価は良好になると考えられるとしている。その点を踏まえると、情報収集目的を十分に明確に意識することによって情報収集に積極的に取り組まないと、行動満足のような主観的な感情経験には結び付かず、それが情報収集努力の閾値効果として現れていることが考えられる。また、満足者の思考様式の方が最大化追求者の思考様式よりも行動満足に結び付き易く、それが情報収集努力の逡減効果となって現れていることが考えられる。

2つの論点に関する考察を踏まえて、「情報収集努力と満足の関係」に関して、図2を修正する形でまとめたのが図18である。今回の考察対象は行動満足のみであるため、縦軸は行動満足にしてある。図18は現時点における考えを反映したものであるが、今回の研究はあくまでも探索的なものであることから、「購買前の情報収集努力が購買後の行動満足に及ぼす非線形的効果」については、引き続き理論的な裏づけの確認も含め、洞察を深めていく必要があると認識している。

ここでは今後の研究に向けての別の課題についても記しておく。今回は情報収集努力と自らのそうした行動に対する満足という消費者の中での自己完結度が比較的高い組み合わせに焦点を当てた。一方、拙稿(2025)における仮説の中で取り上げた製品満足については、消費者自身が直接統御できない製品特性の影響を大きく受けていると考えられる。しかし、拙稿(2025)において確認したように、「情報収集努力→行動満足」「情報収集努力→製品満足」の2つの関係の間には、非線形性の在り方も含めてかなりの近似性が見られる。そうしたことを踏まえると、「情報収集努力→製品満足」の関係については、「情報収集努力によって満足に足る製品を見つけられたから」というだけではなく、自らの積極的な情報収集努力そのものが(製品の良し悪しとは関係無く)行動満足を介して製品に対する満足を高めている可能性も考えられる。そうであれば、製品満足を「購買前の期待と購買後の認識の乖離」で捉えるような考え方は一面的であるということになるため、消費者の購買前の情報収集行動が、行動満足を介して、製品満足を規定する重要な要因となっているのか否かという点については慎重に検討する必要があるだろう。この点は今後の研究に向けての大きな論点であると認識している。

注

- 1) シュワルツ (2004b) は、最大化追求者とは常に最良の選択を追求する人であるとしている。磯部ら (2008) の見解にしたがい、本稿では maximizer を最大化追求者と訳している。情報収集努力に焦点を当てている本稿では、「常に最良の選択を追求するが故に情報収集においても妥協をしない人」と捉えている。
- 2) シュワルツ (2004b) は、満足者 (satisficer) とは他にもっと良い選択肢があろうとなかろうと満足できるものを目指す人のことであるとしている。情報収集努力に焦点を当てている本稿では、「満足できる選択肢に出会えるよう情報収集を行う人」と捉えている。
- 3) この構成概念は、選択肢が増えるほど意思決定が困難になり、満足度が低下するという「選択のパラドックス (paradox of choice)」(シュワルツ, 2004a) を反映しており、この現象は Iyengar & Lepper (2000) による実験的研究によっても裏づけられている。この現象の意義については、アイエンガー (2010 / 瑞穂訳) において紹介されている。また、Inbar, Botti, and Hanks (2011) は、選択肢の数が多い場合にしばしば生じる後悔の増大は、結果の評価だけでなく、選択の過程そのものに対する評価も重要な原因であることを明らかにしている。このことは、選択の過程が、本研究の焦点である行動満足に影響を及ぼす可能性があることを示唆している。なお、認知的負担に関する他の3つの構成概念についても、選択のパラドックスの観点を踏まえて設定した。
- 4) 構成要素によっては情報収集努力の結果とみなした方が自然なものもあるが、フィードバックの存在も含めて厳密な因果関係を特定できてはいないこと、そして各変数に関わる状況を相互に比較し易くするのが望ましいと判断したことから、一元配置分散分析においては情報収集努力を常に従属変数として設定することにした。
- 5) 図4も同様である。

参考文献

- アイエンガー, S. S. (2010). 『選択の科学』(櫻井祐子訳). 東京: 文藝春秋. (原著: Iyengar, S. S. (2010). *The art of choosing*. New York, NY: Twelve.)
- 磯部綾美・久富哲兵・松井豊・宇井美代子・高橋尚也・大庭剛司・竹村和久 (2008). 「意思決定における“日本版後悔・追求者尺度”作成の試み」『心理学研究』79 (5), 453-458.
- 岡澤美紅・竹橋洋毅 (2023). 「最大化と満足化が選択後の後悔と満足度に及ぼす影響」『応用心理学研究』48 (3), 194-195.
- 近藤浩之 (2025). 「購買前の情報収集努力が購買後の満足に及ぼす影響」『東京経学会誌 (経営学)』326, 87-100.
- シュワルツ, B. (2004a). 『なぜ選ぶたびに後悔するのか——「選択の自由」の落とし穴』(瑞穂のりこ訳). 東京: ランダムハウス講談社. (原著: Schwartz, B. (2004). *The paradox of choice: Why more is less*. New York, NY: HarperCollins.)
- シュワルツ, B. (2004b). 「豊かさが招く不幸」(千葉啓恵・編集部訳)『日経サイエンス』, 7月号, 56-63. (原著: Schwartz, B. (2004). The tyranny of choice. *Scientific American*, 290, 70-75.)
- Huang, W.-H., & Zeelenberg, M. (2012). Investor regret: The role of expectation in comparing what is to what might have been. *Judgment and Decision Making*, 7 (4), 441-451.

- Inbar, Y., Botti, S., & Hanks, K. (2011). Decision speed and choice regret: When haste feels like waste. *Journal of Experimental Social Psychology, 47* (3), 533-540.
- Iyengar, S. S., & Lepper, M. R. (2000). When choice is demotivating: Can one desire too much of a good thing? *Journal of Personality and Social Psychology, 79* (6), 995-1006.
- Iyengar, S. S., Wells, R. E., & Schwartz, B. (2006). Doing better but feeling worse. *Psychological Science, 17* (2), 143-150.
- Keller, K. L., & Staelin, R. (1987). Effects of quality and quantity of information on decision effectiveness. *Journal of Consumer Research, 14* (2), 200-213.
- Lee, B.-K., & Lee, W.-N. (2004). The effect of information overload on consumer choice quality in an on-line environment. *Psychology & Marketing, 21* (3), 159-183.
- Ma, J., & Roese, N. J. (2014). The maximizing mind-set. *Journal of Consumer Research, 41* (1), 71-92.
- Peng, M., Xu, Z., & Huang, H. (2021). How does information overload affect consumers' online decision process? An event-related potentials study. *Frontiers in Neuroscience, 15*, Article 695852.
- Schwartz, B., Ward, A., Monterosso, J., Lyubomirsky, S., White, K., & Lehman, D. (2002). Maximizing versus satisficing: Happiness is a matter of choice. *Journal of Personality and Social Psychology, 83* (5), 1178-1197.

付表 1 一元配置分散分析の記述統計と検定結果 (図 4)

従属変数：行動満足
要因：情報収集努力

群	度数	平均値	標準偏差
1	111	3.18	1.31
2	145	3.39	0.91
3	231	3.35	0.69
4	426	3.82	0.82
5	287	4.22	0.94
合計	1,200	3.71	0.96

Levene 検定 (F(4, 1195) = 18.87, p < .001)

Welch 検定 (F(4, 413.28) = 47.29, p < .001)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-0.21	.586
1 vs 3	-0.17	.698
1 vs 4	-0.64	<.001
1 vs 5	-1.04	<.001
2 vs 3	0.04	.989
2 vs 4	-0.43	<.001
2 vs 5	-0.83	<.001
3 vs 4	-0.47	<.001
3 vs 5	-0.87	<.001
4 vs 5	-0.40	<.001

付表 2 一元配置分散分析の記述統計と検定結果 (図 5)

対応する図：図 5 (a)
 従属変数：情報収集努力
 要因：適合商品発見信念

群	度数	平均値	標準偏差
1	73	1.32	0.93
2	101	2.65	1.21
3	350	3.15	0.92
4	443	3.82	0.95
5	233	4.61	0.76
合計	1,200	3.53	1.24

Levene 検定 ($F(4, 1195) = 11.53, p < .001$)
 Welch 検定 ($F(4, 306.11) = 253.46, p < .001$)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-1.34	<.001
1 vs 3	-1.83	<.001
1 vs 4	-2.51	<.001
1 vs 5	-3.29	<.001
2 vs 3	-0.50	.002
2 vs 4	-1.17	<.001
2 vs 5	-1.95	<.001
3 vs 4	-0.68	<.001
3 vs 5	-1.46	<.001
4 vs 5	-0.78	<.001

対応する図：図 5 (b)
 従属変数：行動満足
 要因：適合商品発見信念

群	度数	平均値	標準偏差
1	73	3.18	1.39
2	101	3.16	1.05
3	350	3.33	0.73
4	443	3.91	0.82
5	233	4.33	0.88
合計	1,200	3.71	0.96

Levene 検定 ($F(4, 1195) = 23.94, p < .001$)
 Welch 検定 ($F(4, 293.85) = 69.07, p < .001$)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	0.02	1.000
1 vs 3	-0.15	.889
1 vs 4	-0.73	<.001
1 vs 5	-1.16	<.001
2 vs 3	-0.17	.527
2 vs 4	-0.75	<.001
2 vs 5	-1.18	<.001
3 vs 4	-0.57	<.001
3 vs 5	-1.00	<.001
4 vs 5	-0.43	<.001

付表 3 一元配置分散分析の記述統計と検定結果 (図 6)

対応する図：図 6 (a)
従属変数：情報収集努力
要因：後悔回避のための情報収集

群	度数	平均値	標準偏差
1	95	1.46	1.17
2	101	2.48	0.93
3	274	3.11	0.84
4	422	3.72	0.88
5	308	4.61	0.70
合計	1,200	3.53	1.24

Levene 検定 (F(4, 1195) = 5.03, p < .01)
Welch 検定 (F(4, 344.91) = 293.37, p < .001)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-1.01	<.001
1 vs 3	-1.65	<.001
1 vs 4	-2.26	<.001
1 vs 5	-3.15	<.001
2 vs 3	-0.63	<.001
2 vs 4	-1.25	<.001
2 vs 5	-2.14	<.001
3 vs 4	-0.61	<.001
3 vs 5	-1.50	<.001
4 vs 5	-0.89	<.001

対応する図：図 6 (b)
従属変数：行動満足
要因：後悔回避のための情報収集

群	度数	平均値	標準偏差
1	95	3.11	1.34
2	101	3.30	1.01
3	274	3.33	0.73
4	422	3.81	0.79
5	308	4.25	0.90
合計	1,200	3.71	0.96

Levene 検定 (F(4, 1195) = 19.86, p < .001)
Welch 検定 (F(4, 340.03) = 55.98, p < .001)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-0.19	.792
1 vs 3	-0.23	.520
1 vs 4	-0.71	<.001
1 vs 5	-1.14	<.001
2 vs 3	-0.04	.998
2 vs 4	-0.51	<.001
2 vs 5	-0.95	<.001
3 vs 4	-0.48	<.001
3 vs 5	-0.91	<.001
4 vs 5	-0.44	<.001

付表 4 一元配置分散分析の記述統計と検定結果 (図 7)

対応する図：図 7 (a)
 従属変数：情報収集努力
 要因：多商品情報収集努力

群	度数	平均値	標準偏差
1	104	1.61	1.24
2	185	2.96	1.15
3	433	3.40	0.90
4	319	4.08	0.85
5	159	4.69	0.72
合計	1,200	3.53	1.24

Levene 検定 ($F(4, 1195) = 27.35, p < .001$)
 Welch 検定 ($F(4, 403.99) = 195.41, p < .001$)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-1.35	<.001
1 vs 3	-1.79	<.001
1 vs 4	-2.48	<.001
1 vs 5	-3.09	<.001
2 vs 3	-0.44	<.001
2 vs 4	-1.12	<.001
2 vs 5	-1.74	<.001
3 vs 4	-0.68	<.001
3 vs 5	-1.29	<.001
4 vs 5	-0.61	<.001

対応する図：図 7 (b)
 従属変数：行動満足
 要因：多商品情報収集努力

群	度数	平均値	標準偏差
1	104	3.21	1.44
2	185	3.64	0.92
3	433	3.46	0.76
4	319	3.95	0.83
5	159	4.33	0.94
合計	1,200	3.71	0.96

Levene 検定 ($F(4, 1195) = 30.15, p < .001$)
 Welch 検定 ($F(4, 386.60) = 38.80, p < .001$)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-0.43	.055
1 vs 3	-0.25	.418
1 vs 4	-0.74	<.001
1 vs 5	-1.12	<.001
2 vs 3	0.17	.164
2 vs 4	-0.32	.001
2 vs 5	-0.70	<.001
3 vs 4	-0.49	<.001
3 vs 5	-0.87	<.001
4 vs 5	-0.38	<.001

付表 5 一元配置分散分析の記述統計と検定結果 (図 8)

対応する図：図 8 (a)
 従属変数：情報収集努力
 要因：特定商品情報収集努力

群	度数	平均値	標準偏差
1	96	1.65	1.25
2	134	2.70	1.26
3	422	3.39	0.91
4	365	3.95	0.88
5	183	4.61	0.80
合計	1,200	3.53	1.24

Levene 検定 ($F(4, 1195) = 26.31, p < .001$)
 Welch 検定 ($F(4, 364.52) = 164.55, p < .001$)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-1.06	<.001
1 vs 3	-1.74	<.001
1 vs 4	-2.30	<.001
1 vs 5	-2.97	<.001
2 vs 3	-0.68	<.001
2 vs 4	-1.24	<.001
2 vs 5	-1.91	<.001
3 vs 4	-0.56	<.001
3 vs 5	-1.23	<.001
4 vs 5	-0.67	<.001

対応する図：図 8 (b)
 従属変数：行動満足
 要因：特定商品情報収集努力

群	度数	平均値	標準偏差
1	96	3.17	1.39
2	134	3.43	1.03
3	422	3.47	0.77
4	365	3.92	0.81
5	183	4.38	0.87
合計	1,200	3.71	0.96

Levene 検定 ($F(4, 1195) = 25.62, p < .001$)
 Welch 検定 ($F(4, 357.05) = 48.57, p < .001$)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-0.27	.506
1 vs 3	-0.30	.251
1 vs 4	-0.75	<.001
1 vs 5	-1.21	<.001
2 vs 3	-0.03	.997
2 vs 4	-0.48	<.001
2 vs 5	-0.94	<.001
3 vs 4	-0.45	<.001
3 vs 5	-0.91	<.001
4 vs 5	-0.46	<.001

付表 6 一元配置分散分析の記述統計と検定結果 (図 9)

対応する図：図 9 (a)
従属変数：情報収集努力
要因：質重視情報収集志向

群	度数	平均値	標準偏差
1	57	1.60	1.28
2	100	2.77	1.25
3	452	3.30	1.08
4	396	3.85	0.99
5	195	4.35	1.01
合計	1,200	3.53	1.24

Levene 検定 ($F(4, 1195) = 8.96, p < .001$)
Welch 検定 ($F(4, 257.47) = 87.66, p < .001$)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-1.17	<.001
1 vs 3	-1.70	<.001
1 vs 4	-2.26	<.001
1 vs 5	-2.76	<.001
2 vs 3	-0.53	.001
2 vs 4	-1.08	<.001
2 vs 5	-1.58	<.001
3 vs 4	-0.56	<.001
3 vs 5	-1.06	<.001
4 vs 5	-0.50	<.001

対応する図：図 9 (b)
従属変数：行動満足
要因：質重視情報収集志向

群	度数	平均値	標準偏差
1	57	3.02	1.55
2	100	3.37	1.10
3	452	3.48	0.79
4	396	3.90	0.79
5	195	4.26	1.01
合計	1,200	3.71	0.96

Levene 検定 ($F(4, 1195) = 33.55, p < .001$)
Welch 検定 ($F(4, 248.67) = 34.71, p < .001$)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-0.35	.558
1 vs 3	-0.46	.189
1 vs 4	-0.88	.001
1 vs 5	-1.24	<.001
2 vs 3	-0.11	.876
2 vs 4	-0.53	<.001
2 vs 5	-0.89	<.001
3 vs 4	-0.42	<.001
3 vs 5	-0.78	<.001
4 vs 5	-0.35	<.001

情報収集努力の閾値効果と遞減効果：行動満足への影響

付表7 一元配置分散分析の記述統計と検定結果 (図10)

対応する図：図10 (a)
 従属変数：情報収集努力
 要因：情報収集割り切り志向

群	度数	平均値	標準偏差
1	75	2.55	1.82
2	137	3.58	1.35
3	416	3.49	1.02
4	439	3.59	1.13
5	133	3.97	1.36
合計	1,200	3.53	1.24

Levene 検定 (F(4, 1195) = 34.78, p<.001)

Welch 検定 (F(4, 294.95) = 9.35, p<.001)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-1.03	<.001
1 vs 3	-0.94	<.001
1 vs 4	-1.04	<.001
1 vs 5	-1.42	<.001
2 vs 3	0.09	.951
2 vs 4	-0.01	1.000
2 vs 5	-0.39	.124
3 vs 4	-0.10	.655
3 vs 5	-0.48	.002
4 vs 5	-0.38	.028

対応する図：図10 (b)
 従属変数：行動満足
 要因：情報収集割り切り志向

群	度数	平均値	標準偏差
1	75	3.35	1.45
2	137	3.80	1.01
3	416	3.50	0.83
4	439	3.85	0.85
5	133	4.05	1.11
合計	1,200	3.71	0.96

Levene 検定 (F(4, 1195) = 22.53, p<.001)

Welch 検定 (F(4, 294.74) = 14.39, p<.001)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-0.46	.116
1 vs 3	-0.15	.904
1 vs 4	-0.51	.033
1 vs 5	-0.70	.004
2 vs 3	0.31	.014
2 vs 4	-0.05	.983
2 vs 5	-0.24	.338
3 vs 4	-0.36	<.001
3 vs 5	-0.55	<.001
4 vs 5	-0.19	.364

付表 8 一元配置分散分析の記述統計と検定結果 (図 11)

対応する図：図 11 (a)
従属変数：情報収集努力
要因：満足基準による情報収集停止志向

群	度数	平均値	標準偏差
1	77	2.62	1.78
2	122	3.48	1.29
3	458	3.39	1.03
4	393	3.68	1.14
5	150	4.07	1.32
合計	1,200	3.53	1.24

Levene 検定 ($F(4, 1195) = 28.80, p < .001$)
Welch 検定 ($F(4, 299.31) = 14.84, p < .001$)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-0.85	.004
1 vs 3	-0.77	.004
1 vs 4	-1.05	<.001
1 vs 5	-1.44	<.001
2 vs 3	0.09	.959
2 vs 4	-0.20	.532
2 vs 5	-0.59	.002
3 vs 4	-0.29	.001
3 vs 5	-0.68	<.001
4 vs 5	-0.39	.014

対応する図：図 11 (b)
従属変数：行動満足
要因：満足基準による情報収集停止志向

群	度数	平均値	標準偏差
1	77	3.33	1.50
2	122	3.61	1.07
3	458	3.47	0.79
4	393	3.90	0.80
5	150	4.26	1.06
合計	1,200	3.71	0.96

Levene 検定 ($F(4, 1195) = 38.07, p < .001$)
Welch 検定 ($F(4, 295.14) = 26.92, p < .001$)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-0.28	.607
1 vs 3	-0.15	.913
1 vs 4	-0.57	.014
1 vs 5	-0.94	<.001
2 vs 3	0.13	.705
2 vs 4	-0.29	.051
2 vs 5	-0.65	<.001
3 vs 4	-0.42	<.001
3 vs 5	-0.79	<.001
4 vs 5	-0.36	.002

付表 9 一元配置分散分析の記述統計と検定結果 (図 12)

対応する図：図 12 (a)
従属変数：情報収集努力
要因：情報収集の楽しさ

群	度数	平均値	標準偏差
1	111	1.85	1.36
2	138	3.02	1.14
3	424	3.28	1.00
4	328	3.95	0.86
5	199	4.65	0.70
合計	1,200	3.53	1.24

Levene 検定 (F(4, 1195) = 36.67, p<.001)
Welch 検定 (F(4, 402.74) = 176.14, p<.001)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-1.17	<.001
1 vs 3	-1.43	<.001
1 vs 4	-2.10	<.001
1 vs 5	-2.80	<.001
2 vs 3	-0.26	.131
2 vs 4	-0.93	<.001
2 vs 5	-1.63	<.001
3 vs 4	-0.67	<.001
3 vs 5	-1.37	<.001
4 vs 5	-0.70	<.001

対応する図：図 12 (b)
従属変数：行動満足
要因：情報収集の楽しさ

群	度数	平均値	標準偏差
1	111	3.32	1.32
2	138	3.55	0.92
3	424	3.44	0.79
4	328	3.82	0.87
5	199	4.45	0.81
合計	1,200	3.71	0.96

Levene 検定 (F(4, 1195) = 18.45, p<.001)
Welch 検定 (F(4, 396.91) = 57.05, p<.001)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-0.23	.544
1 vs 3	-0.12	.894
1 vs 4	-0.50	.003
1 vs 5	-1.12	<.001
2 vs 3	0.11	.734
2 vs 4	-0.27	.030
2 vs 5	-0.90	<.001
3 vs 4	-0.38	<.001
3 vs 5	-1.00	<.001
4 vs 5	-0.63	<.001

付表 10 一元配置分散分析の記述統計と検定結果 (図 13)

対応する図：図 13 (a)
 従属変数：情報収集努力
 要因：情報収集の苦痛

群	度数	平均値	標準偏差
1	228	3.37	1.68
2	302	3.58	1.15
3	408	3.33	0.99
4	171	3.73	1.06
5	91	4.25	1.19
合計	1,200	3.53	1.24

Levene 検定 ($F(4, 1195) = 52.31, p < .001$)
 Welch 検定 ($F(4, 397.40) = 14.39, p < .001$)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-0.20	.514
1 vs 3	0.04	.998
1 vs 4	-0.35	.080
1 vs 5	-0.88	<.001
2 vs 3	0.24	.027
2 vs 4	-0.15	.613
2 vs 5	-0.68	<.001
3 vs 4	-0.39	<.001
3 vs 5	-0.92	<.001
4 vs 5	-0.53	.005

対応する図：図 13 (b)
 従属変数：行動満足
 要因：情報収集の苦痛

群	度数	平均値	標準偏差
1	228	4.08	1.14
2	302	3.73	0.88
3	408	3.49	0.81
4	171	3.71	0.83
5	91	3.76	1.29
合計	1,200	3.71	0.96

Levene 検定 ($F(4, 1195) = 12.84, p < .001$)
 Welch 検定 ($F(4, 391.02) = 12.86, p < .001$)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	0.35	.001
1 vs 3	0.59	<.001
1 vs 4	0.37	.002
1 vs 5	0.32	.240
2 vs 3	0.24	.002
2 vs 4	0.02	1.000
2 vs 5	-0.03	1.000
3 vs 4	-0.22	.026
3 vs 5	-0.27	.327
4 vs 5	-0.04	.998

情報収集努力の閾値効果と遞減効果：行動満足への影響

付表 11 一元配置分散分析の記述統計と検定結果 (図 14)

対応する図：図 14 (a)				対応する図：図 14 (b)			
従属変数：情報収集努力				従属変数：行動満足			
要因：情報過多による判断困難				要因：情報過多による判断困難			
群	度数	平均値	標準偏差	群	度数	平均値	標準偏差
1	95	2.77	1.80	1	95	3.90	1.34
2	122	3.33	1.38	2	122	3.67	1.09
3	365	3.40	0.92	3	365	3.51	0.80
4	414	3.69	1.12	4	414	3.81	0.81
5	204	3.90	1.34	5	204	3.84	1.15
合計	1,200	3.53	1.24	合計	1,200	3.71	0.96

Levene 検定 (F(4, 1195) = 48.85, p < .001)				Levene 検定 (F(4, 1195) = 21.02, p < .001)			
Welch 検定 (F(4, 348.63) = 12.77, p < .001)				Welch 検定 (F(4, 348.80) = 8.27, p < .001)			
Games-Howell に基づく群間比較				Games-Howell に基づく群間比較			
比較	平均差	p 値		比較	平均差	p 値	
1 vs 2	-0.56	.092		1 vs 2	0.22	.681	
1 vs 3	-0.63	.011		1 vs 3	0.39	.061	
1 vs 4	-0.92	<.001		1 vs 4	0.09	.973	
1 vs 5	-1.13	<.001		1 vs 5	0.06	.997	
2 vs 3	-0.07	.985		2 vs 3	0.17	.534	
2 vs 4	-0.37	.061		2 vs 4	-0.13	.711	
2 vs 5	-0.57	.003		2 vs 5	-0.17	.688	
3 vs 4	-0.30	.001		3 vs 4	-0.30	<.001	
3 vs 5	-0.50	<.001		3 vs 5	-0.33	.003	
4 vs 5	-0.20	.336		4 vs 5	-0.03	.997	

付表 12 一元配置分散分析の記述統計と検定結果 (図 15)

対応する図：図 15 (a)

従属変数：情報収集努力

要因：商品数過多による選択困難

群	度数	平均値	標準偏差
1	90	2.82	1.85
2	128	3.39	1.24
3	320	3.38	0.95
4	423	3.61	1.13
5	239	3.92	1.31
合計	1,200	3.53	1.24

Levene 検定 (F(4, 1195) = 44.27, p<.001)

Welch 検定 (F(4, 357.30) = 11.20, p<.001)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-0.57	.088
1 vs 3	-0.56	.050
1 vs 4	-0.79	.002
1 vs 5	-1.09	<.001
2 vs 3	0.01	1.000
2 vs 4	-0.22	.397
2 vs 5	-0.53	.002
3 vs 4	-0.22	.029
3 vs 5	-0.53	<.001
4 vs 5	-0.31	.020

対応する図：図 15 (b)

従属変数：行動満足

要因：商品数過多による選択困難

群	度数	平均値	標準偏差
1	90	3.83	1.38
2	128	3.78	1.02
3	320	3.49	0.80
4	423	3.78	0.86
5	239	3.83	1.07
合計	1,200	3.71	0.96

Levene 検定 (F(4, 1195) = 16.13, p<.001)

Welch 検定 (F(4, 357.05) = 7.62, p<.001)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	0.05	.998
1 vs 3	0.35	.160
1 vs 4	0.06	.995
1 vs 5	0.00	1.000
2 vs 3	0.29	.032
2 vs 4	0.01	1.000
2 vs 5	-0.05	.994
3 vs 4	-0.29	<.001
3 vs 5	-0.34	<.001
4 vs 5	-0.05	.966

付表 13 一元配置分散分析の記述統計と検定結果 (図 16)

対応する図：図 16 (a)				対応する図：図 16 (b)			
従属変数：情報収集努力				従属変数：行動満足			
要因：情報収集による決定困難				要因：情報収集による決定困難			
群	度数	平均値	標準偏差	群	度数	平均値	標準偏差
1	99	2.91	1.86	1	99	3.79	1.49
2	177	3.44	1.32	2	177	3.80	1.01
3	427	3.34	1.00	3	427	3.48	0.76
4	348	3.71	1.10	4	348	3.85	0.84
5	149	4.15	1.20	5	149	3.91	1.13
合計	1,200	3.53	1.24	合計	1,200	3.71	0.96

Levene 検定 (F(4, 1195) = 55.08, p<.001)			Levene 検定 (F(4, 1195) = 28.38, p<.001)		
Welch 検定 (F(4, 370.23) = 18.75, p<.001)			Welch 検定 (F(4, 365.13) = 13.29, p<.001)		
Games-Howell に基づく群間比較			Games-Howell に基づく群間比較		
比較	平均差	p 値	比較	平均差	p 値
1 vs 2	-0.53	.093	1 vs 2	-0.01	1.000
1 vs 3	-0.43	.171	1 vs 3	0.31	.273
1 vs 4	-0.80	.001	1 vs 4	-0.07	.993
1 vs 5	-1.24	<.001	1 vs 5	-0.12	.954
2 vs 3	0.10	.899	2 vs 3	0.32	.002
2 vs 4	-0.27	.139	2 vs 4	-0.06	.968
2 vs 5	-0.71	<.001	2 vs 5	-0.12	.867
3 vs 4	-0.37	<.001	3 vs 4	-0.37	<.001
3 vs 5	-0.81	<.001	3 vs 5	-0.43	<.001
4 vs 5	-0.44	.002	4 vs 5	-0.06	.978

付表 14 一元配置分散分析の記述統計と検定結果 (図 17)

対応する図：図 17 (a)
従属変数：情報収集努力
要因：欠点認知による購入回避傾向

群	度数	平均値	標準偏差
1	223	3.22	1.69
2	243	3.53	1.21
3	436	3.35	0.99
4	220	3.90	0.95
5	78	4.33	1.15
合計	1,200	3.53	1.24

Levene 検定 ($F(4, 1195) = 75.27, p < .001$)
Welch 検定 ($F(4, 372.61) = 22.61, p < .001$)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	-0.31	.158
1 vs 3	-0.13	.813
1 vs 4	-0.68	<.001
1 vs 5	-1.11	<.001
2 vs 3	0.18	.289
2 vs 4	-0.36	.003
2 vs 5	-0.80	<.001
3 vs 4	-0.54	<.001
3 vs 5	-0.98	<.001
4 vs 5	-0.44	.025

対応する図：図 17 (b)
従属変数：行動満足
要因：欠点認知による購入回避傾向

群	度数	平均値	標準偏差
1	223	3.97	1.24
2	243	3.81	0.93
3	436	3.44	0.79
4	220	3.81	0.78
5	78	3.96	1.14
合計	1,200	3.71	0.96

Levene 検定 ($F(4, 1195) = 13.66, p < .001$)
Welch 検定 ($F(4, 366.09) = 17.27, p < .001$)

Games-Howell に基づく群間比較

比較	平均差	p 値
1 vs 2	0.16	.508
1 vs 3	0.54	<.001
1 vs 4	0.16	.456
1 vs 5	0.01	1.000
2 vs 3	0.37	<.001
2 vs 4	0.00	1.000
2 vs 5	-0.15	.828
3 vs 4	-0.37	<.001
3 vs 5	-0.53	.002
4 vs 5	-0.15	.811